

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

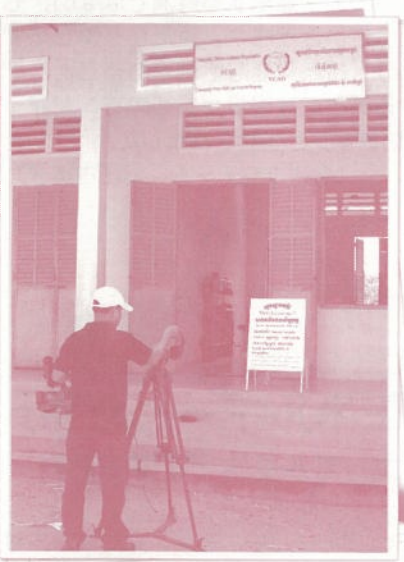
## きれいに仕上がった 織り親へのスカーフ



**前**回の訪問から3ヵ月。1月27日にタケオの職業訓練センターの少女たちが自由なデザインで織ったスカーフの品評会をおこなうためにカンボジアを訪れた。12月の地球の木会報誌で募集した「織り親（おりおや）」サポート募金に協力してくださった方へ渡すスカーフである。どんなスカーフが織れているのか。前回完成していた15枚はとてもよい出来ばえだったので、そのままがんばって織って来ていたらいいのだが……。

**タ**ケオの農村では、12月の1ヶ月間は稲刈りで、大人も子どもも手伝う。少女たちもその例外ではない。「全部完成した」という連絡は受けていたものの果たしてスカーフはどんな出来ばえなのか、前回美しく飾り付けしたショールームはどうなっているのか、お客さんは来て買ってきているのか……車がタケオのセンターに近づくにつれ、不安が募ってきた。

**セ**ンターに到着すると、ショールーム付近に何やら大きなビデオカメラを抱えた人たちがいる。センターのテヴィーさんに聞いてみると、ショールームを綺麗にし、看板を作ったら、なんと、今日はカンボジアの主要テレビ局がそれを聞きつけて取材に来たという。ちょっぴりキザな感じのレポーターが、テヴィーさんと少女たちにインタビューをおこなった。この



新しい看板を撮影するカメラマン

## CONTENTS

- きれいに仕上がった織り親へのスカーフ ……1
- 設立20周年記念連続講座 ……2～3
- 設立20周年記念パーティ ……3
- ラオス現地訪問 ……4～5
- マンガルトール村交流ツアー ……6
- 綿入れ半てんを届けました ……7
- 皆の思いをひとつに ……7
- 地球の木カフェとカンボジア報告会 ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8



入賞した生徒へ記念品を渡す大藪さん

センターのことを紹介し「少女たちが一生懸命織っているこのスカーフを買うと、少女たちの支援になる」と伝えていた。私たちにとってもその取材の場に立ち会えたことは嬉しい驚きだった。

**翌**日は、いよいよ品評会だ。日本からは、クメールシルクチームのメンバーに加え今回は、地球の木会員で織物に関心のある人、地球の木カフェを開いたことのあるギャラリーの人など、総勢8人が参加した。少女たちは、自分の作品の中から2枚ずつ選びアピールした。「日本人の皆さんの肌の色に合うように考えて作りました」などと話すもいる。投票はそれぞれにシールを貼っていく形にした。私たちに加え生徒たち、先生、通訳、ドライバー、村の人たちも参加して投票が始まった。結果は接戦で、チャンラーさんが優勝した。わずかな賞金を日本から持っていった水引のついたお祝いののし袋に入れて、記念品と一緒に手渡した。全員に気を配りながら話す大藪さんの品評のあと、織物の先生とテヴィーさんに感想を述べてもらった。「農繁期だったのに、皆、一生懸命にがんばって、そしてとても上達しました」結果は、先生たちの予想とは少し違ったようだ。日本人とカンボジア人では、色や柄の好みも違う。「次は別のセンターの先生たちを審査員として連れて来て、技術面でも評価したい」と言われた。センターの側からもどンドン、いろいろなアイデアが出てくるのは頼もしい限りだ。

**今**回の作品はそれぞれに素敵な作品に仕上がっている。1枚たりとも同じものはなく、世界でたったひとつのスカーフなのだ。きっと「織り親」の皆さんにも喜んでいただける……と確信しました。

(クメールシルクチーム 筒井由紀子)



## 設立20周年記念連続講座

地球の木が設立20周年を迎えようとしていた年の3月に東日本大震災が起こりました。私たちの前に大きな試練が突きつけられ、「祝う」というよりも、これからの暮らし・社会をどうしていったらよいかを考える機会を持ちたいと思いました。「分かち合う暮らし」をテーマにした「第1回 参加型の地域づくり」「第2回 もうひとつの経済」「第3回 地産地消のエネルギー」という3つの講座はそれぞれつながっており、世界とのつながり、あるべき暮らしやコミュニティのあり方が見えてくるものでした。物質的な豊かさに慣れ、本当に大切なものが見えにくくなった今の社会の構造を今こそ根本から見直して新しい形を創造していかなくてはならないと思います。

パーティでは、これまで支えてくださった関連団体の皆様、会員の皆様と共に集い、今後の連携を確かめることができました。これを新たなエネルギーとして活動を進めていきたいと思ひます。(理事長 丸谷士都子)

### 第2回 いきいきと生きるための「経済」 ～「連帯経済」で分かち合う「幸せ」 (12月10日(土) 開港記念会館)

#### 私たちの身近にある経済活動

お話をしてくれたのはNPO法人アジア太平洋資料センター(PARC)事務局長の内田聖子さん。今まで耳にしたことがなかった「連帯経済」ということば。「難しい経済の話に違いない」と身構えて聞いてみると、それはとても理解しやすく、私たちの身近にもあるさまざまな経済活動の総称だということがわかりました。今回の講座参加者も、生協、フェアトレード、介護サービス、リサイクルショップ、野菜の直売所、被災地の物品販売、地域貨幣など、さまざまな事例に関わっていました。

#### 行き過ぎた市場経済を変えたい

「現在の経済のグローバル化が、世界のごく少数に富を一極集中させ、格差拡大、紛争、環境破壊、地域経済の沈下など多くの問題を引き起こしています。こうした状況に対して、市民社会の側から行き過ぎた市場経済をチェックしようという概念が、「連帯経済」であり、社会的事業や、コミュニティビジネス、環境保全、地域再生、フェアトレード、地域通貨など、多方面で実践されています。」と、内田さんは次々に活動の例を示してくれました。

#### 古くからの相互扶助も

「連帯経済」は世界に広がり、さまざまに実践されていますが、日本やアジア各国には古くから相互扶助に根ざす互助の金融(頼母子講など)が行われており、地域社会の中



内田聖子さん

で世代を超えて受け継がれてきています。現在はアジアでは、貧困の現場から立ち上がったいろいろな取り組みが見られますが、日本ではホームレス支援などがあげられます。

#### いきいきと働く女性たち

また、日本の農村などで、過疎化・高齢化の状況の中、女性たちが中心となり、地域資源を活かした小さなビジネスを行っている「連帯経済」の例(徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」など)がいくつもあげられました。それまでは、陰で働いていた女性たちが、人と人のつながりの大切なことに気づき、「もったいない」「社会の役に立つことをしたい」と活動を始めました。利潤ではなく絆を大切にしていきて暮らしている人々の幸せな姿を見ることができ

#### 繋がってやっていこう

私たちも、身近なところや地域で「連帯経済」のさまざまな活動を実践できることがわかりました。ひとりの力ではどうにもならない利潤のみを追求する経済ではない、もう一つの経済。地域をいきいきとさせ、私たちを幸せにする経済です。内田さんは「持続可能な活動であること、そして一つの団体でできることには限りがあるので、繋がってやっていくことが大切です」と強調されました。

(会報作成チーム 沼田由美子)



浦上健司さん

### 第3回 「飯舘村から考える地産地消のエネルギーと原発」 (2月4日(土) オルタナティブ生活館)

#### 進められていた地産地消

今回の講師、NPO法人エコロジー・アーキスケープの浦上健司さんは、長年、福島県飯舘村の自然エネルギーを活用する自立した村づくりに関わってきました。主産業が農業という飯舘村は総合計画の中で「まていライフ」(スローライフ)を宣言し、太陽光、太陽熱、木質エネルギーなどに重点を置いた「新エネルギービジョン」を作成。村長を「入るを図る前に、出ざるを制す」というキーワードで説得したエネルギーの地産地消には感心しました。「地域の活性

のためには、地域でお金を回す仕組みが必要」ということを地で行ったやり方です。現在、村外に支払っている光熱費の内、灯油を地元の木に替えることで、山の管理ができるようになり、その上、大勢がチップなどの木質エネルギーを利用することで地域経済効果が得られます。そのモデル事業として、老人ホームにデンマーク製チップボイラーを導入し、浮いた重油代を地元へ還元。村民の関心を高めるため、デンマーク大使館と共催シンポジウムを開催しました。また木質エネルギーの利用で、CO<sub>2</sub>の排出権を企業が買い取ることをマスコミに取材してもらいました。風土に合った暮らしを、目に見える形で村民に提案した「まていな家」の建設などは戦略的にみても素晴らしいことです。

それらの努力が27キロ離れたところにある福島第一原子力発電所の事故のせいで、ストップしてしまいました。しかし、このエネルギーの地産地消の仕組みが他の地域で生かされることを望みます。

#### 地域で作っていききたいエネルギー

そして、もう一人の講師は、大嶋朝香さん。自然界と人間の共生を危うくしている原因が、私たちのエネルギー多消費型の生活であること。エネルギーの90%以上を輸入に頼っているものか考え直す時期に来ていること。省エネ型



大嶋朝香さん

の生活、省エネ型の社会、地域でエネルギーを自給し、できれば地域の中でエネルギーを作っていきたいと考え、大嶋さんはNPO法人ひらつかエネルギーカフェを設立しました。「エネルギー問題は一人では解決できない」と言います。仲間作りの場、相談の場、コミュニケーションがとれる場としてカフェ事業も同

時に開始しました。そこを拠点に情報を発信し続けることで、市民の関心を掘り起こし、専門家とのネットワーク、エネルギー関連団体とのつながりができ、平塚市に対しても環境政策で提案できるようになりました。

3.11 以後省エネは当たり前、自然エネルギーの買い取りや、自治体の動きなど、地域でエネルギーを自給しようという流れが出てきました。今後の活動としては、応援隊を組織し、一歩踏み出そうという飯舘村のかあちゃんたちの支援を行うことと、小口でグリーン電力を買う仕組みができたので、自然エネルギーの価値を支え、原発に頼らないエネルギーの促進に力を入れたいということでした。

(20周年記念事業実行委員 坂下まさみ)

## \*\*\* \* \* \* \* 設立20周年記念パーティ \* \* \* \* \*

講演の後、開かれたパーティには、60名近くの仲間たちが集まり、会場がいっぱいになりました。日本国際ボランティアセンターの谷山代表理事の「これからもこの出会いを大切に「幸せ分かち合い」の輪を広げていくために、手をつないでいきましょう」の挨拶のほか、来賓の方々から温かいお祝いの言葉を頂きました。東日本大震災で、地球の木が緊急支援をしてきたIVY気仙沼の若者たち3名もお祝いにかけつけてくれました。彼らの「地球の木との繋がりを大切に、地元でこれからも頑張っていく」という新たな決意宣言に大きな応援の拍手が起きました。

お話を聞いたり、おしゃべりをしながら頂いた今回のお料理の半分は、さがみ野でエスニック料理店を開いているビルンさんにお願ひしました。ラオス風そうめん「カオブン」のスープは美味しくて、おかわりをする人もいました。ラオスで収穫した黒米を使ったデザートのカオニャオや大根のアチャール(ネパール風即席漬け)など、支援地の

味を楽しみました。

会場にはカンボジアの少女たちの織ったクメールシルクのスカーフも展示されました。また20年間のプロジェクトやスタディツアーの写真も展示しましたが、懐かしい写真に当時を思い出しておしゃべりに花がさいている方もいて、あらためて地球の木の歴史を感じました。

20周年を一つの区切りとして、次の時代に向けてこれからもアジアの人々と手を繋いで、皆で幸せを分かち合っていきたいとの思いを強くしました。

(20周年記念事業実行委員 豊田由紀子)

20周年アンケートへのご協力をありがとうございました。以下の方々が当選され、福袋をお送りいたしました。中村時子さま、山口節子さま、角田みつえさま、藤井千里さま 他1名



IVY気仙沼の若者たち

おいしい料理と懐かしい再会



# ラオス現地訪問

12月11日～16日までラオス現地調査を行いました。  
今回はJVCの日常の活動を見せてもらいました。

## 村の境界線をめぐって

今回の訪問の中で、ファイサイ村とパルー村との境界線の打ち合わせに私たち地球の木からの二人が同行しました。

ファイサイ村は2年前訪れたとき、村のすぐそばの森が伐採され、燃えている現場に出くわした村である。

ところ、両村の言い分がそうかけ離れているわけではないということになり、その後の話し合いは、飲み物や日本から持っていったお菓子も配られ、穏やかに進んだ。

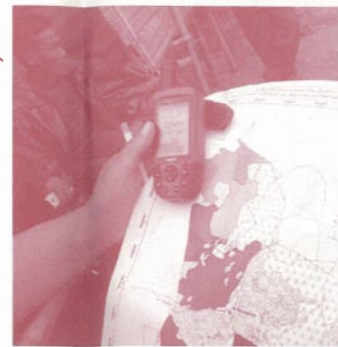
ファイサイ村での開発が、隣村との境界線問題を深刻なものにしている。JVCによると、このような境界線をめぐるトラブルが頻発しているとのことだ。

## 開発＝国の発展？

特にラオスの役人にとって、「開発」は国の発展とイコールである。ラオス政府も、「自給自足的な生活」から、「GDP」数字で表れる仕事でお金を稼ぐ生活」への転換を促しているように、現在のラオスでの「開発」と村人たちの伝統的な暮らし方は相反する概念となっている。

村人にインタビューした時、「日本における「開発」とは？」という質問が出た。急速に「開発」が進む中で、「開発」のあり方は、ラオスの人々にとって差し迫った問題だ。「開発」によって確かに便利になったけれど必ずしも幸福にはつながらなかったことは、3.11を経験した今こそ、多くの日本人が感じていることであろう。「農的な暮らし」や、「ゆったりと過ごす時間」「自然からとり過ぎない、足るを知る暮らし」は、これからの日本に必要なことだと見直されてきている。ラオスの人々にも、そのことを伝え、日本などの先進国の後追いをするのではなく、ラオスらしい、新しい開発のモデルとなっていてほしいと望むばかりだ。  
(ラオスチーム 中野真理子)

最新技術GPSで村の境界線を地図におとす



## ラオスの村を訪れて

初めて訪れたラオスの村は、どこか懐かしい印象だった。豊かな自然の中に高床式の家が点在し、さわさわと木々の葉が揺れる庭先で、村人たちがのんびりと話をする。にぎやかに子どもたちが遊ぶ側を、犬や、にわとり、豚、水牛などの家畜が自由に歩き回る。ラオスの村人同士には、穏やかだがしっかりとした絆が感じられる。訪れた村々で「村の良いところは？」との質問をしたが、ほとんどの村で「団結力があるところ」という答えが返ってきた。社会保障が貧弱なラオスでは、困った人を親戚など身近な人々で助けるという習慣があり、助けてもらう側もそのことを引け目に感じることはないという。村人からの日本への質問の中には「障がい者の問題をどうしているか？」というものもあり、村人の言葉の端々から、全ての人や生き物と共に暮らしていくことをあたりまえと考えている様子が見てとれた。



校庭で遊ぶ村の子どもたち

一方、あるブルー族の村では少し違った印象も持った。少数民族のブルー族はラオスの中でも比較的貧しい。お手製のパチンコやほんの1～2個のビー玉で遊ぶ子どもたちの明るい表情は他の村と変わらないものだったが、家々や村人の姿、持ち物から、この村の住民の中の貧富の差が見て取れる。みんな等しく貧しいと言われるラオスの村々を見ていく中で、この村の住民間の貧富の差はなにかいびつなものに見えた。

日本で生活している中で、高価な食事や買い物をする人の間近にホームレスなどの貧しい人がいても、それが景色の一部であるかのように違和感も持たなくなっている。ラオスのこの村で感じた“いびつさ”からは、このような日本の風景に慣れた自分自身の歪みも同時に見せられているようだった。

多かれ少なかれ、日本もラオスの村のように、自然豊かで人の距離が近い暮らしだったのではないだろうか？物質的に豊かになっていく過程で、物理的にも精神的にも人の間に距離ができ、人の関わり合いが狭まってしまった。ラオスの人々とその暮らしからは、昔はあったであろう生活と私たちが辿ってきた「発展」の道のりが透けて見える。もちろん、豊かで自由な暮らしの良さもある。それでも、このラオス訪問を経て、私たちの未来の所々に、ラオスで見たような懐かしい風景があつて欲しいと感じた。  
(事務局 山内ひろ子)



子どもと一緒に、森に夕飯の食料を調達に行く

当時村人たちは、病院を建てるからと説明されたと言っていた。今回車で通り過ぎてみると、そこはゴムの苗木が植林され、病院ではなくベトナムのゴム会社の大きな事務所が出来上がっていた。

土地局、森林局などの行政官の同席の下、両村の長老たちが集まって、話し合いがパルー村で始まった。

まず、JVCの現地スタッフがポスター大の衛星写真を示しながら、両村の主張する境界線を説明する。気になるのか、パルー村の村民たちも集まってきて、打ち合わせの様子を遠巻きに見ている。パルー村の村長さんがなにやら大声でまくし立てる。後で聞くと、ファイサイ村がゴム植林会社に村の大事な土地を3分の1も渡してしまったこと、そのため利用できる森が減少したファイサイ村が境界線をずらすようとしているのではないかと、その怒りをぶつけていたのだ。パルー村はこの村長さんの先祖が開拓した450年も続く村だそうで、村の土地に対する思いは深いのであろう。

## GPSを利用して

その後、実際のその境界に行ってみることにになり、私たちも同行した。車で行けるところまで行って、後は丘の上まで歩いていく。道の両側は身の丈程のなんとなく頼りなげなゴムの苗木が、乾いた赤土に植わっている。丘の上に乗って見渡すと、この丘全体がゴムの植林地に変貌したのがよくわかった。

結局それぞれの主張する境界の点をGPSで記録し、村に戻って衛星地図におとした

## JVCラオス現地代表 平野将人さんインタビュー

「相手の文化を尊重した振る舞いを心がけています」

Q：NGOに入ったきっかけは何ですか？

A：9.11アメリカ同時多発テロ事件からいろいろと調べていく中で、南北問題に行き着き、貧困で苦しむ人たちのために何かをしたいと考えるようになった。当時、飲料メーカーの営業として働いており、企業活動を通じた社会貢献もできたが、より直接的に貢献したいと思った。

Q：ラオスの良いところはどこですか？

A：日本ほどいろいろなことがきちんとしていないが、それを許容することで社会全体にゆとりができていく。システムがしっかりしていない分、現場適応力も高い。また、家族や近隣の人々など、世代の違う人同士の交わりがあり、コミュニケーション能力が高い。

Q：ラオスがどのようになって欲しいと考えていますか？

A：食料が安定して供給され、また、より多くの人々が義務教育を受けられるようになって欲しい。今後、無秩序に開発が進んだ場合、外国投資が入ることで貧富の差が生まれ、結果、村人が村を出て行くことに繋がってしまうことになりかねない。現在、ラオスで営まれている自給自足で、かつ、自然と共生した豊かな生活は、脆弱性がなく、持続可能なものだ。まだ、開発があまり



中央が平野さん

入っていないラオスなら、「自然を守りながら、村で自給自足の生活の中で楽しく豊かに生きていく」というモデルケースを実現できるのではないかなと思う。

Q：ラオスで活動するのにあたって、外国人として気をつけていることは何ですか？

A：サワナケートからビエンチャンへ移動する場合、公共のバスを使うなど規則として決まっていることは現地スタッフと同様に行うようにしている。また、遅刻をしないなど、駄目と言っていることはやらないことも気をつけている。また、すすめられたものは全部食べる、パーシーの儀式などで現地の風習を大切にすること、相手の文化を尊重した振る舞いを心がけている。

Q：ラオスでの活動において、地球の木に期待していることは何ですか？

A：長い期間ラオスの活動を支援していただいている。私たちの生活のあり方など積極的に考える団体だと感じている。広い意味で同じ方向性を目指すなかで、ラオスでの活動を建設的な意味で批判的にも見てもらい、活動のあり方を共に考えていきたい。

## JVCラオス 森林チームメンバー ホンケオさんインタビュー

ホンケオさんは20代半ばのとても明るい元気な女性。少数民族のブルー族出身である。彼女の存在はただ通訳というだけでなく、ブルー族の代弁者としての意味も大きい。

現在、彼女の出身の村で、村人の了解もないまま、村の真ん中に道路を作ると郡当局から言われ、村人が家を強制的に移動させられるなどの問題が起きているそうだ。ホンケオさんの言葉から、少数民族の誇りと現状を何とかしたいという熱い思いが伝わってきた。



Q：NGOに入ったきっかけは何ですか？

A：JVCに入る前は、ある別のNGOで通訳や村の情報を集めるボランティアをしていた。JVCが、サワナケートでブルー語の通訳を探していると聞き、NGOの仕事をやりたいと思い応募した。この仕事を通して、同じ民族の人々を助けたいと思っている。

Q：ラオスのどんなところが好きですか？

A：自然が豊かなところ。そして食べ物も豊富にあるところ。食べ物が足りなければ、多くを持つ人から分けてもらうというような昔からの助け合いの風習があった。しかし、今それが変わってきている。ものが欲しい、お金が欲しいという人が多くなってきた。

Q：ラオスをどんな国にしたいですか？

A：少数民族の私たちの暮らし方を壊すのではなく、私たちの要望を良く聞いて、相談しながら開発を行って欲しい。Q：JVCにかかわってよかったことは？

A：一番良かったことは、法律を知ったことと、他の団体と経験を共有できたこと。JVCで学んだ法律を、自分の出身の村の人たち、さらに、行政官にも伝えることができた。法律やほかの村の事例を伝えることで、自分たちの権利や対処の方法を知り、ゴム会社からの土地の長期借用の提案を断ることができた。村人への影響力があったと思っている。





## ネパール マンガルトール村を訪れて

10月29日～11月6日に大学生の樋口麗さんとマンガルトール村を訪れました。

まだダサイン(ネパールの秋祭り)のお祭り気分が残る中、たくさんの学生たちや農民たちと交流することができました。

### 高校生とのワークショップ

奨学生や地区担当の高校生など14人が参加。現地パートナーSAGUN理事カマル・フヤルさんが進行役となり、参加型手法を使って文化や生活を紹介し合いました。日課、祭、食事、結婚、マンガルトール村と横浜のいいところの5つのグループに分かれて話し合い、発表しました。マンガルトール村のいいところを紹介してくれたのは、大学生になったラムシン君。第1期奨学生です。学校・病院・警察署などの施設や道路がある、水資源が豊富、文化的多様性、多様性の中の調和などが挙げられました。その後、私たちは東日本大震災の新聞記事を見せて、備えが必要であることを伝えました。ネパール東部でも9月に大きな地震があったばかりで関心はひときわ高かったようです。



村のいいところを発表するラムシン君

### テストも大事だけど……

奨学生との意見交換を行いました。SAGUNスタッフのサルバジットさんは、最近結果が芳しくない高校卒業認定国家試験(SLC)をおろそかにしてはならないことを熱弁。ネパールでは進学や就職にとっても大切なのです。しかし、樋口さんは、「テストのための勉強だけでなく、勉強そのものが楽しいことを知ってほしい。色々な体験をしてほしい」と伝えました。生徒たちの心に響いたことと思います。

### パナンチェの農民との集会

収入創出プログラムが始まったパナンチェ地区で農民たちの集会が開かれました。プログラムに参加するまでは家庭用に野菜を作っていた人たちですが、耕作地を広げ、融資された資金を返済しようと、熱心に取り組んでいます。

「日本では野菜は足りているのか」と聞いた男性がいました。「農村人口が減り自給率が低いのです」と答えると、「ここで作った野菜を持って帰るといい」と言ってくれました。とても農業に誇りを持った人たちという印象を受けました。(ネパールチーム 丸谷士都子)

### 現地で学んだことをこれからの勉強に活かしたい

今回のマンガルトール村訪問は私にとって初めての経験でしたが、現地の人々と直接触れ合う機会に恵まれ、貴重で充実した時間を過ごすことができました。村の豊かな文化多様性と自然、人々の穏やかな笑顔、ゆっくり時間が流れるような独特の雰囲気といったものにすっかり魅了されるとともに、多くの気づきを得られたと感じています。

学校の施設はシンプルではありますが、学生たちは高い志や希望を持って勉強している様子が窺えました。学生たちとの交流においては、男の子が「家族と話す時間・家事」は日課として欠かせないと言い、ある女の子は「もし地震が来たら何を持って逃げるの?」という質問に対して「バヒニ!(=妹!)」と答えるなど、勉学に励みつつも家庭での役割をしっかりと全うする様子が特に印象的でした。

また、農村委員会では、農家の人たちが能動的に意思決定に関わっており、全員の声が反映されるように進められていました。開発における理想的な「参加型アプローチ」が観察できたような気がします。

さらに、村では人々が農業と家畜の世話で生計を立てローカルな生産・消費を行っているため、食料・ガス・電気など村の「資源」が無駄なく循環しています。ホームステイを通じて、そのサイクルがまさに人々の絆・深い信頼関係のもととなっており、持続可能な生活に結びついていることが分かってきました。

今回の旅によって、「開発」とは単なる産業化・都市化を意味しないということを実感しました。むしろ、「地域の誇りや伝統を維持しつつコミュニティに如何に改善をもたらすか」に重点が置かれるべきだということに今は考えています。私は今後も「開発」についての勉強を続けたいと考えていますが、マンガルトールで得たこれらの貴重な経験と気づきを最大限活用していきたいと思っています。(樋口 麗)



畑の見学

\*詳しくは、報告書(300円)をお読みください

## 気仙沼支援報告

### 綿入れ半てんを届けました

厳しい寒さの日が続く被災地気仙沼で、仮設住宅に暮らすお年寄りに、昨年末綿入れ半てんを送りました。IVY気仙沼には「福祉チーム」があり、雪や凍結のために外に出るのを控え、家の中に閉じこもりがちなお年寄りに声かけをする「見守り訪問」を行っています。その中の希望者に配りました。ハンドクリームと一緒に「ほかほか温まってくださいね」と手書きのメッセージが添えられました。暖房費を節約し、こたつに入って服を何枚も重ね着している人が多い中、とても喜ばれたそうです。

IVY気仙沼がおこなっている「キャッシュ・フォー・ワーク」は3月末で終了します。2月に入り、失業保険の期間が終了し、職探しをする人が増えています。現在「キャッシュ・フォー・ワーク」では40数名のワーカーが働いています。被災地の復興支援に終わりが見えない中、彼らの今後が気になります。「支援がどんどん減っていくのは非常に不安なことだけど、皆が支援に依存してしまうことへの懸念も多い」とIVY気仙沼の齋藤さんは話しています。IVY気仙沼の若者たちが「地域のために」と新しく立ち上げる法人の名前は「Tree Seed」。お年寄りにとっても同じ気仙沼の若者たちが地域に残り、活動を続けることは何より心強いことです。「地球の木から種をもらって大きくなります」という彼らの自立をじっくりと見守っていきたいと思います。(事務局長 筒井由紀子)



## 3カ年計画策定委員会

### 皆の思いをひとつに

地球の木では、NPO設立以来、3カ年の中期計画を立てて、その都度、方針を決めながら活動しています。次の3カ年は、第4次3カ年計画。今年度も理事を中心に10名のメンバーが、月に1、2回のペースで集まって話し合いを行っています。

まず地球の木のミッションを明確にし、委員会全体でそれを共有するための作業を、ワークショップなどを行いながらすすめました。そしてその結果、今、まさに地球の木の設立の原点に立ち戻って、国内外の人たちとつながりながら、持続可能で「豊かな」暮らしのあり方を生活者としての視点で考え、経済一辺倒ではない「分かち合う暮らし」を提案していくことが必要だという共通認識ができました。それを土台に3カ年計画では、新規プログラムの検討・開始や、現在のプログラムの充実について、また、さまざまな国内活動、組織内の役割の見直しなどについての話し合いが続いています。

これからも地球の木の活動への温かなご協力をお願い致します。(理事 乳井 京子)



### 地球の木カフェとカンボジア報告会

12月20日(火)今年最後の地球の木カフェが、開かれました。事務所に一歩足を踏み入れてびっくり!!街の“ショップ”に入った気分。地球の木グッズがきれいにディスプレイされており、思わず手にとってしまう品々。キラリと光っていました。

地球の木がフェアトレードのアドバイスをお願いしている聖実さんがディスプレイしてくれました。事務所の一角が見事にすっきりと居心地良い空間になりました。

また、シックな黒に金ラメの模様が入ったカンボジア製のテーブルクロスの上で食べるナンカレーや、コーヒー、お茶は、同時開催されたカンボジアクメールシルクチームの現地報告を身近に感じさせ、タケオの訓練センターの少女たちの織ったスカーフが、いとおしく、いっそう応援したくなりました。皆さんも一度は、事務所を訪ねてみませんか!素敵ですよ。(会報作成チーム 柏柳 紗)

## 活動日誌(12月～2012年2月抜粋)

- |        |  |        |   |
|--------|--|--------|---|
| 12月 1日 | 第3回3カ年計画策定委員会                            | 29日    | ネパール報告会   |
| 3日     | 展示販売(東戸塚デポー)                             | 30日    | 第8回ランチ連絡会                                       |
| 6日     | 第8回理事会・第4回3カ年計画策定委員会                     | 2月 4日  | 地球の木20周年記念連続講座第3回「飯館村から考える地産地消のエネルギーと原発」・記念パーティ |
| 7~8日   | 展示販売(らいふタウンデポー)                          | 9日     | 第7回3カ年計画策定委員会                                   |
| 10日    | 20周年記念連続講座第2回「いきいきと生きるための経済」展示販売(日限山デポー) | 12日    | よこはま国際フォーラム「困っている人を助けたいと思ったら…援助する前に考えよう!」       |
| 14~15日 | 展示販売(大丸デポー)                              | 14日    | 第10回理事会   |
| 15日    | 第7回ランチ連絡会                                | 17~19日 | 南北コリアと日本のともだち展(青山こどもの城)                         |
| 20日    | 地球の木カフェ・カンボジア報告会                         | 28日    | 第9回ランチ連絡会                                       |
| 22日    | 地球の木カフェat夢うさぎ                            | 28~29日 | 展示販売(つつじが丘デポー)                                  |
| 23日    | 第5回3カ年計画策定委員会                            |        |   |
| 1月 17日 | 第9回理事会 第6回3カ年計画策定委員会                     |        |   |
| 27~31日 | カンボジア・ラオス訪問                              |        |   |

\*その他、各チームミーティング、20周年記念事業実行委員会などが開かれました。



## 第13回地球の木総会のお知らせ

日時：2012年5月26日(土) 13:30~15:30 総会  
場所：オルタナティブ生活館  
※詳細は同封の「総会のお知らせ」をご覧ください。



## 年末募金キャンペーン2011報告

皆さまのサポートにより、地球の木の活動は行われています。ご寄付いただいた方々のご協力に、厚く感謝申し上げます。

夢織りサポート「織り親」募金	155,000円
ラオス村人募金	47,500円
村人に届けよう、元気募金	45,500円
無指定	138,000円
合計	386,000円

※2011年12月末までにいただいたご寄付の領収書は、2012年1月末に発送いたしました。ご不明な点は、事務局までご連絡ください。

## 教材体験 FESTA 2012

2日間で30のワークショップが開催されます。地球の木はワークショップ「マジカルバナナv3」で参加します。店頭に並ぶバナナは、なぜこんなに安いのでしょうか？貿易自由化の恩恵を受けている典型であるバナナの、その向こう側の世界と私たちを繋ぎ、考えるワークショップです。

日時：3月24日(土) 10:00~12:10  
会場：JICA地球ひろば (東京メトロ日比谷線広尾駅)  
問合せ・申込み：開発教育協会 (DEAR)まで  
TEL: 03-5844-3630  
URL: <http://www.dear.or.jp/festa2012>

## 地球の木カレンダー2012

### 「いのちの輝き」販売報告

毎年多くの方々にお買い上げいただきましてありがとうございます。今年度も1,100部完売いたしました。カレンダーの収益は、地球の木の支援地ラオス、ネパール、カンボジアのプログラムに使わせていただきます。

## カンボジア・ラオス報告会 「織り親さん」スカーフを選んでください

### ①カンボジア報告会 at 遊土

日時：3月16日(金)  
場所：ギャラリー遊土 TEL:045-573-6645  
当日は、マクロビオティクのランチがあります。ご予約ください。織り親募金にご寄付いただいた方にはスカーフをお渡しいたします。

### ②地球の木カフェ

日時：3月20日(火) 12:00~17:00  
場所：地球の木事務所  
14:00~カンボジア報告会  
15:00~ラオス報告会  
織り親募金にご寄付いただいた方にはスカーフをお渡しいたします。

※詳細は同封のちらしをご覧ください。

## あーすフェスタかながわ2012

月日：5月19日(土)・20日(日)  
場所：地球市民かながわプラザ  
(JR根岸線 本郷台駅徒歩3分)

### みんなで育てる多文化共生 ~虹色の希望明日につなごう~

地球の木が実行委員として参加している多文化のおまつりです。外国籍県民、地域の人々、NGO・NPO団体が企画する多彩な催しが繰り広げられます。外国籍県民フォーラム、シネマコレクション、ステージ、踊りのワークショップ、世界のおそび場、世界屋台村、ワールドバザールなど。地球の木も毎年屋台やバザールに参加しています。企画委員も募集中です。

## 3月~5月テポ-展示販売のお知らせ

■3月14日(水)・15日(木) のぼりとテポ-  
■3月16日(金)・17日(土) センター南テポ-  
■4月 4日(水)・ 5日(木) 霧が丘テポ-  
■5月18日(金)・19日(土) 日限山テポ-  
お近くのみなさま、是非いらしてください。シルクのスカーフやバッグを手にとって見てください。

## 編集後記...50号に寄せて



ワープロで文字を打ち、誌面を切り張りして手作りの会報から、現在の形になって50号。関わってくださった方々の顔が、目に浮かびます。

気がついたら50号。それって13年目。私たちも年とったわねえ。でもやめられない、けっこう楽しいこの編集作業。



原稿の誤字脱字修正作業から、自ら原稿を書き、パソコンで添付ファイルをまわし校正をする。すごい成果の13年です。

学生時代、文章を書くのが大の苦手だった私が、編集に関わって、書くことが趣味になっちゃうなんて、人生って不思議なものですね♪



いくら一生懸命作っても読んでもらえなければ意味がない。魅力的な会報誌作りにゴールはない。



思えば13年前、絵(カット)をかわれて編集チームに加わったのでした。鍛えられましたね。



手元のファイルを見ると17号から仲間入りさせてもらっている編集作業。至らなさを感じつつ助けられ学ぶ事の多かった、そして楽しい8年でした。

## 地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。